

大分県現代俳句協会句会報 第28号

令和7年12月27日発行

【自薦作品結果&第一回雑詠句会選句号】

自薦作品 結果発表 (選句 & 選評)

27点 点滴が心音となる聖夜かな 足立 攝

25点 風花やわたしに降りる駅がない 立花真由美

22点 躓いて北風の尾にしがみつく 足立 町子

20点 立っている我も一景冬の村 有村 王志

17点 諦めも理性のひとつ草の花 河野 輝暉

13点 手のひらは無限の自由零余子落つ 有村 王志

12点 日記にも本音をはぶく余寒かな 時松由美子

11点 未整理の父の遺品に棲む寒気 足立 攝

11点 恵方巻芯まで届かぬ恩返し 河野 則子

11点 石のごと男がひとり冬の耕 鎌倉真由美

11点 独りにはひとりの至福冬満月 高橋 玲子

10点 山茶花のどこへ散っても母の胸 足立 町子

《9点句》

花豆に風の一言ぶら下がる

菅 攝子

八月の灰汁が上手に掬えない

赤嶺 広史

身の細る恋など出来ぬ着ぶくれて

時松由美子

鏡餅パツクの中から見る世相

岡村 君香

《8点句》

軽トラに瓦礫を積んだまま師走

足立 町子

反抗期の穴から覗く冬の空

赤峯 友子

《7点句》

砲声や由布の裾野に若菜摘む

牧野 桂一

生かされて生きて悔いなし桃の花

高倉 直人

自己主張してもいいのよ冬苺

井上 則子

主語のない貴方の言葉秋日和

赤嶺 広史

ボクの名を何故か知ってるサンタさん

古後 粒勝

《7点句つづき》

凍雲に抱かれる村の息づかい

上田たかし

古希にして半農半遊冬日和

岡村 君香

《6点句》

シーソーのふわり子の靴冬木の芽

牧野 桂一

煮凝や質素に生きた母の過去

生野 義晴

百三十八億年の日向ぼこ

足立 攝

生きるのに倦きてコホンと咳をする

神 慶子

ため息もからりと抜けて冬木立

井上 則子

寒椿思案の形に落ちるかな

有村 王志

鍵穴を覗く初日を受け入れる

上田たかし

春を待つ五百羅漢のささめごと

吾 亦 紅

《5点句》

デモクラシー生死は不自由敬老日

河野 輝暉

桃の種投ぐるや海は女かな

河野 輝暉

待つことを今に覚えて寒椿

神 慶子

寒椿こころをひらくふりをして

藤 万 葉

人間も神も試作の冬の星

坂本 一光

葉牡丹が喜怒哀楽を紡ぎゆく

上田たかし

歩かねば歩けなくなる柿日和

時松由美子

梅咲いて限界村も動きだし

御手洗豊海

和太鼓や腹にずしりと秋の雲

安森 範明

地球アラートどんぐりを備蓄せよ

川畑英里花

《4点句》

用終へし装具冷たき爆心地

牧野 桂一

年女暦の白蛇動き出す

宮川三保子

元旦や鬼門を静め琴の爪

河野 則子

物置に凍えて眠るブルタニカ

藤 万 葉

除夜詣戦禍の子らは飢餓のまま

藤 万 葉

皴ひとつ増えて新年これもよし

佐藤 次江

降る雪や世界はかくも美しき

坂本 一光

北を向く渡り鳥にもある国境

足立 鶴男

故郷や呼んで届かぬ冬の月

田代 直之

湯豆腐の中に真実沸々と

田代 直之

不意打のくしやみに飛びし記憶かな

河野 洋子

初夢の母が差し出すだんご汁

赤嶺 広史

旧姓を呼ばれふり向く年の市

竹石 末子

泰然と師走の中に放屁する

鎌倉真由美

十五夜やこの街をみな供花として

本田 圭子

虫の音やゆっくり歩く下駄の街

森山 秀子

桜咲く届かぬ地球の裏おもて

甲斐加代子

晩年はこの道と決め竜の玉

赤峯 友子

冬の蚊がするりとバスに乗り込みぬ

佐々木 玉

秋遍路心の闇を一つ捨つ

菅 勲

大寒の仔牛の太き瞳澄む

川西 達子

ぼくカレー！声をそろえる三日かな

有永真理子

「あの実は……」の次が言えずに剥く蜜柑

稲田久美子

枯れゆくものに鬱の日の乳房

白土 正江

蠟梅や手押し車の母見上ぐ

國廣 精膳

もの言わぬ地球の受難山眠る

児玉 利子

秋水に絵筆洗えば自我の色

川畑英里花

《3点句》

音読の一人芝居や室の花

宮川三保子

粉雪に同化してゆく修行僧

佐藤 優美

おごそかにいちょう落葉の交響曲

生野 義晴

ファイナルの第九を惜しむ年の暮れ

生野 義晴

旅に疲れて辛夷の花も風の中

足立 攝

何もかも奇跡に見ゆる初明り

菅 登貴子

制服の裾膨らみて沈丁花

菅 登貴子

気まじめな父のこさえた福笑

岡野 紘宣

猫じゃらし婆をくすぐる三ツの子

内田トシ子

疎きこと丸くのみこみ日記果つ

天田 泉美

箸紙の中から福が顔をだす

天田 泉美

歳時記のページが重い目借時

早澤まり子

生コンに八月の陽を叩き込む

赤嶺 広史

春遠し山の他無し山の中

海神 瑠珂

初春や歩みはじめた足力

志賀 文子

秋の月まん丸はちと恥ずかしい

小野みち子

天高し今日の気分はK-POP 小野みち子
 産声の轟く医院福寿草 安田 文
 頑なな夫の心と日向ぼこ 安田 文
 埋もれゆく昭和彷徨今朝の雪 甲斐加代子

咳一つ残して老師席を立ち 御手洗豊海
 冬薔薇や芽吹きの赤く嘘の無し 林 香澄



自薦作品作品集(点盛)

自薦作品には70名の会員から279句が集まりました。作品番号の下の○印の中が採られた数(点盛)です。今号には第1回雑詠句会の選句用作品集と、第2回雑詠句会の募集要項が掲載されています。

- | | | | |
|---------------------|-------|--------------------|-------|
| 1④用終へし装具冷たき爆心地 | 牧野 桂一 | 22③旅に疲れて辛夷の花も風の中 | 足立 攝 |
| 2②民の一家聖樹に星揚げ | 牧野 桂一 | 23⑪未整理の父の遺品に棲む寒気 | 足立 攝 |
| 3⑥シーソーのふわり子の靴冬木の芽 | 牧野 桂一 | 24⑥百三十八億年の日向ぼこ | 足立 攝 |
| 4⑦砲声や由布の裾野に若菜摘む | 牧野 桂一 | 25③何もかも奇跡に見ゆる初明り | 菅 登貴子 |
| 5 3女らに白く囁く春の風 | 菅 攝子 | 26②水仙の並びし記憶里の駅 | 菅 登貴子 |
| 6②野薊の昼を点せば愛山河 | 菅 攝子 | 27①日影さえ愛しく思う春散歩 | 菅 登貴子 |
| 7⑨花豆に風の一言ぶら下がる | 菅 攝子 | 28③制服の裾膨らみて沈丁花 | 菅 登貴子 |
| 8②三葉芹摘めば新たな風になる | 菅 攝子 | 29①自衛にも敵地攻撃大枯野 | 下司 正昭 |
| 9④年女暦の白蛇動き出す | 宮川三保子 | 30 愚かなる汝の路はこの吹雪 | 下司 正昭 |
| 10 冬ざれや杭に鴉の思案顔 | 宮川三保子 | 31②虎落笛過ぎゆく時を研ぎ澄ます | 下司 正昭 |
| 11③音読の一人芝居や室の花 | 宮川三保子 | 32 鰯雲言葉真理の深みから | 下司 正昭 |
| 12②春の空絵本の蝶を放ちやる | 宮川三保子 | 33②会釈して通り過ぎるや秋夕焼 | 永松左世美 |
| 13①十七の初キス浅春の目眩 | 佐藤 優美 | 34 賀状には三つ子男の子の並びおり | 永松左世美 |
| 14①過激派の君の冤罪冬木の芽 | 佐藤 優美 | 35①口ずさむ懐メロキッチン明けて春 | 永松左世美 |
| 15 ミヤンマーに届け!平和の冬薔薇 | 佐藤 優美 | 36 陽炎と共にステップ吾子二人 | 永松左世美 |
| 16③粉雪に同化してゆく修行僧 | 佐藤 優美 | 37④元旦や鬼門を静め琴の爪 | 河野 則子 |
| 17③おごそかにいちよう落葉の交響曲 | 生野 義晴 | 38⑪恵方巻芯まで届かぬ恩返し | 河野 則子 |
| 18①まほろばのははの愛した石路の花 | 生野 義晴 | 39①念仏を唱える間に失せ冬の虹 | 河野 則子 |
| 19⑥煮凝や質素に生きた母の過去 | 生野 義晴 | 40 六郷の山肌照らし初夕日 | 河野 則子 |
| 20③ファイナルの第九を惜しむ年の暮れ | 生野 義晴 | 41⑤デモクラシー生死は不自由敬老日 | 河野 輝暉 |
| 21②⑦点滴が心音となる聖夜かな | 足立 攝 | 42 鬼門を祓い葱だけ残す畠仕舞 | 河野 輝暉 |

- | | |
|---------------------|-------|
| 43⑰諦めも理性のひとつ草の花 | 河野 輝暉 |
| 44⑤桃の種投ぐるや海は女かな | 河野 輝暉 |
| 45①山茶花のはしゃぐ小径を寂しがる | 神 慶子 |
| 46⑤待つことを今に覚えて寒椿 | 神 慶子 |
| 47①幸せのぎゅっと詰まったシクラメン | 神 慶子 |
| 48⑥生きるのに倦きてコホンと咳をする | 神 慶子 |
| 49 冬休み対話邪魔する子のスマホ | 岡野 紘宣 |
| 50③気まじめな父のこさえた福笑 | 岡野 紘宣 |
| 51②嬰兒が主役となりし二十歳の日 | 岡野 紘宣 |
| 52①ターザンも取れぬ高さに烏瓜 | 岡野 紘宣 |
| 53③猫じやらし婆をくすぐる三ツの子 | 内田トシ子 |
| 54①初鏡亡母の面影紅をさし | 内田トシ子 |
| 55①秋夕焼はちみつ色に星染めし | 内田トシ子 |
| 56①露草や涙きらりと零れ落つ | 内田トシ子 |
| 57②⑤風花やわたしに降りる駅がない | 立花真由美 |
| 58②開戦忌昭和のノイズ漂流す | 立花真由美 |
| 59②狂ひぬくほどの過去なく古ひひな | 立花真由美 |
| 60②桃啜るはは羊水に遊ぶわれ | 立花真由美 |
| 61③疎きこと丸くのみこみ日記果つ | 天田 泉美 |
| 62①寒紅や短かき文に封をする | 天田 泉美 |
| 63③箸紙の中から福が顔をだす | 天田 泉美 |
| 64①極月の隅っこにゐる幸と逢ふ | 天田 泉美 |
| 65④物置に凍えて眠るブルタニカ | 藤 万 葉 |
| 66②冬葦よく陽のあたる墓の裏 | 藤 万 葉 |
| 67④除夜詣戦禍の子らは飢餓のまま | 藤 万 葉 |
| 68⑤寒椿ころをひらくふりをして | 藤 万 葉 |
| 69②赤茶けた色優しくて山眠る | 佐藤 次江 |
| 70④皴ひとつ増えて新年これもよし | 佐藤 次江 |
| 71 元朝や鳥待つ窓辺孫の笑み | 佐藤 次江 |
| 72 なんとという空の清しさお元日 | 佐藤 次江 |

- 73 高令化減りゆく年賀いつかゼロ 大神 愛子
- 74 巨大マグロ男の底意地惚れるワザ 大神 愛子
- 75 ①寒いわねメダカの動き鈍い訳 大神 愛子
- 76 ①お年玉今年で終わり奮発す 大神 愛子
- 77 ⑤人間も神も試作の冬の星 坂本 一光
- 78 ①方円に従う不屈冬の水 坂本 一光
- 79 ④降る雪や世界はかくも美しき 坂本 一光
- 80 ①あれこれの思い句にして春まぢか 坂本 一光
- 81 ②落し穴ハマリ双六五個戻る 高倉 直人
- 82 ①背中から火の立ち昇るドンド焼 高倉 直人
- 83 凍鶴の一万フィートの翼かな 高倉 直人
- 84 ⑦生かされて生きて悔いなし桃の花 高倉 直人
- 85 ①庭あれば柚子一本でもあればいい 早澤まり子
- 86 ①名月や招待席でお待ちします 早澤まり子
- 87 グッドバイ肩こしの手に春夕日 早澤まり子
- 88 ③歳時記のページが重い目借時 早澤まり子
- 89 ④北を向く渡り鳥にもある国境 足立 鶴男
- 90 ①晦日蕎麦食べて為政を激論す 足立 鶴男
- 91 大晦日諸行無常の鐘の音 足立 鶴男
- 92 雑煮食う忍び寄る老い吹き飛ばし 足立 鶴男
- 93 ⑥ため息もかりりと抜けて冬木立 井上 則子
- 94 ⑦自己主張してもいいのよ冬苺 井上 則子
- 95 竹林によわき風あり二月尽 井上 則子
- 96 ①初午や形見の袖かけてみる 井上 則子
- 97 ④故郷や呼んで届かぬ冬の月 田代 直之
- 98 ④湯豆腐の中に真実沸々と 田代 直之
- 99 ②ポリープの全身麻酔山眠る 田代 直之
- 100 ②炬燵猫そろそろ狩りの時間です 田代 直之
- 101 ②峡の村梅一輪に始まりぬ 河野 洋子
- 102 ②筆はじめ真白き紙に置く言葉 河野 洋子
- 132 ①寒紅をうすく八十路の小豆飯 竹石 末子
- 131 ②鍋ぶたの音ことごとと年暮るる 竹石 末子
- 130 ④旧姓を呼ばれふり向く年の市 竹石 末子
- 129 ②年毎の涙もろさよぼたん雪 竹石 末子
- 128 ①万両は季節を知りて頬染めて 清末ヤヨイ
- 127 ④四方の春花開くかや句詠めば 清末ヤヨイ
- 126 ②わが心大寒に入る母逝きて 清末ヤヨイ
- 125 ②寒林はきびしき耐えて年輪を 清末ヤヨイ
- 124 ②鬼が舞い火の粉飛びちり春近し 安部ユリ子
- 123 ①かすかなり旋律否や小夜時雨 安部ユリ子
- 122 ②古雑誌束を抜けたし春を知る 安部ユリ子
- 121 ①静寂や目映いほどに寒の月 安部ユリ子
- 120 ②年用意江戸紫ののぼり幟 志賀 文子
- 119 ③初春や歩みはじめた足力 志賀 文子
- 118 ③箱根路やたすきを渡す笑顔あり 志賀 文子
- 117 ①初詣神の導き朋の笑み 志賀 文子
- 116 ③春遠し山の他無し山の中 海神 瑠珂
- 115 ①馬鹿野郎オレオレ詐欺の初電話 海神 瑠珂
- 114 ②復刻せしスープレ餃子や寒厳し 海神 瑠珂
- 113 ②雪雪雪神奔放の水墨画 海神 瑠珂
- 112 ②C Tに確と病巣冴え返る 新志 光夫
- 111 ①草萌える津波避難の丘に座し 新志 光夫
- 110 ②駆け抜けしこの七十路に余寒ふと 新志 光夫
- 109 ②菩提寺に村の来歴大冬木 新志 光夫
- 108 ④初夢の母が差し出すだんご汁 赤嶺 広史
- 107 ⑨八月の灰汁が上手に掬えない 赤嶺 広史
- 106 ⑦主語のない貴方の言葉秋日和 赤嶺 広史
- 105 ③生コンに八月の陽を叩き込む 赤嶺 広史
- 104 ④不意打のくしゃみに飛びし記憶かな 河野 洋子
- 103 ②スケボーの少年が舞ふ初みそら 河野 洋子
- 133 ②他人事ひとことにしないと誓う12、8 赤峰佐代子
- 134 枇杷の花間遠になりし友の笑み 赤峰佐代子
- 135 ②いつまでも葬の白菊香りおり 赤峰佐代子
- 136 ②元朝や深呼吸せり九重山 赤峰佐代子
- 137 ②冬の光雲の谷間に七色よ 時松ヤスコ
- 138 ②笑い初め猫のあくびで撮る写真 時松ヤスコ
- 139 ②満作の花びら踊り湯けむりよ 時松ヤスコ
- 140 ②蕾待つ日課の日記福寿草 時松ヤスコ
- 141 ②ポケットがちよつと寒い冬田舎 加藤 征孝
- 142 ①春の音、一段と寂しい今日の旗じるし 加藤 征孝
- 143 ②平和とて平和外交呼び覚ます 加藤 征孝
- 144 ②蝮が家に入りたがってるよ！ 加藤 征孝
- 145 ②注文の多いわが犬秋の夕暮れ 小野みち子
- 146 ③秋の月まん丸はちと恥ずかしい 小野みち子
- 147 ③天高し今日の気分はK-POP 小野みち子
- 148 ①輝に時々からむ糸がある 小野みち子
- 149 ①木犀の香り漂う母の家 小川 良子
- 150 ①紫陽花や六歩で渡る神の橋 小川 良子
- 151 ①賀状書く一人一人の顔浮かべ 小川 良子
- 152 ①終活や大樹を伐つて涼むかな 有村 王志
- 153 ②立っている我も一景冬の村 有村 王志
- 154 ⑥寒椿思案の形に落ちるかな 有村 王志
- 155 ⑬手のひらは無限の自由零余子落つ 有村 王志
- 156 ②送り火の残してゆくや足の冷え 薬師寺裕二
- 157 ①母なれや門火の影の虫の声 薬師寺裕二
- 158 ①かんざしに秋風ふるる祇園かな 薬師寺裕二
- 159 ①冬紅葉雪降りつつも朱を残し 薬師寺裕二
- 160 ①十兆円重さ百トン着ぶくれる 古後 粒勝
- 161 ②築三百国宝級の寒さかな 古後 粒勝
- 162 ⑦ボクの名を何故か知ってるサンタさん 古後 粒勝

192 ⑤ 歩かねば歩けなくなる柿日和 時松由美子

191 ⑥ 春を待つ五百羅漢のささめごと 吾亦紅

190 ① 待春の生木くすぶる煙かな 吾亦紅

189 ① 鳥低く飛び行く空の雪催ひ 吾亦紅

188 ① 菜の花に染まる一色ファンタジー 吾亦紅

187 ③ 頑なな夫の心と日向ぼこ 安田文

186 ③ 頑なな夫の心と日向ぼこ 安田文

185 ③ 頑なな夫の心と日向ぼこ 安田文

184 ③ 産声の轟く医院福寿草 安田文

183 ② 凍空やもうすぐドクターヘリが来る 本田圭子

182 ② 除夜の鐘母のレシビの胡麻豆腐 本田圭子

181 ④ 十五夜やこの街をみな供花として 本田圭子

180 ④ 十五夜やこの街をみな供花として 本田圭子

179 ① 石のごと男がひとり冬の耕 鎌倉真由美

178 キューポラのある街あたり冬ざらるる 鎌倉真由美

177 ④ 泰然と師走の中に放屁する 鎌倉真由美

176 ④ 泰然と師走の中に放屁する 鎌倉真由美

175 ④ 泰然と師走の中に放屁する 鎌倉真由美

174 ① 春着の子豆腐配りの父を待つ 幸谷恵子

173 ① 春着の子豆腐配りの父を待つ 幸谷恵子

172 ⑦ 凍雲に抱かれる村の息づかい 幸谷恵子

171 ⑦ 凍雲に抱かれる村の息づかい 幸谷恵子

170 ⑤ 葉牡丹が喜怒哀楽を紡ぎゆく 上田たかし

169 ② 着ふくれてことばを捨てていく園児 上田たかし

168 ⑥ 鍵穴を覗く初日を受け入れる 上田たかし

167 ⑩ 山茶花のどこへ散っても母の胸 足立町子

166 ① 子が転び今朝の淑気が破られる 足立町子

165 ② 躓いて北風の尾にしがみつく 足立町子

164 ⑧ 軽トラに瓦礫を積んだまま師走 足立町子

163 セルフ・パークション正月三日かな 古後粒勝

222 ④ 晩年はこの道と決め竜の玉 赤峯友子

221 ⑧ 反抗期の穴から覗く冬の空 赤峯友子

220 ② 草木の枯れる音して芭蕉句碑 赤峯友子

219 ① 母が居たあの日の朝や今日は雪 高橋玲子

218 ① 母が居たあの日の朝や今日は雪 高橋玲子

217 ② わが顔に誓うことあり初鏡 高橋玲子

216 ① 独りにはひとりの至福冬満月 高橋玲子

215 ① 独りにはひとりの至福冬満月 高橋玲子

214 ② うどんにも優等生の寒卵 竹下美津子

213 ① 芋を焼く焦げ臭風を乗りこなす 竹下美津子

212 とくとくとお湯飲湯たんぼ友になる 竹下美津子

211 ② 枯れてゆく未完のままにたくましく 御手洗豊海

210 ⑤ 梅咲いて限界村も動きだし 御手洗豊海

209 ⑤ 梅咲いて限界村も動きだし 御手洗豊海

208 ③ 咳一つ残して老師席を立ち 御手洗豊海

207 ④ 桜咲く届かぬ地球の裏おもて 甲斐加代子

206 ① 帰省子はいあうんの呼吸雪見酒 甲斐加代子

205 ② 初日差す碑文字に残る師の一語 甲斐加代子

204 ③ 埋もれゆく昭和彷徨今朝の雪 甲斐加代子

203 ③ 埋もれゆく昭和彷徨今朝の雪 岡村君香

202 ⑨ 鏡餅パツクの中から見る世相 岡村君香

201 ② 木枯やどうすりやいいのセルフレジ 岡村君香

200 ⑦ 古希にして半農半遊冬日和 岡村君香

199 生きていたがもうけもん春の朝 森山秀子

198 萩刈られ金色の日を賜はりぬ 森山秀子

197 ④ 虫の音やゆつくり歩く下駄の街 森山秀子

196 亡き夫は夏の海へとまつしぐら 森山秀子

195 ⑫ 日記にも本音をはぶく余寒かな 時松由美子

194 ⑨ 身の細る恋など出来ぬ着ふくれて 時松由美子

193 ⑨ 身の細る恋など出来ぬ着ふくれて 時松由美子

252 ① 冬ざらるる大人のイソップ間に合ひぬ 林香澄

251 ④ 「あの美は……」の次が言争に刺さる 稲田久美子

250 ① 木枯でたどるリストの狂詩曲 稲田久美子

249 ① 木枯でたどるリストの狂詩曲 稲田久美子

248 ② お正月三半規管が音ねをあげる 稲田久美子

247 ② 黒岳の初冠雪よ世にあらさず 加納知子

246 ① みかんむく奥能登とつとふたをして 加納知子

245 ① 日向ぼこ渋沢さんが頬かむり 加納知子

244 ① 春隣りこんなところにかめ虫が 加納知子

243 ② 秋天を二両列車が横切れり 有永真理子

242 ① 諸天をくすつと笑う中二の娘 有永真理子

241 ② 平穏を祈る両手に初日射す 有永真理子

240 ④ ぼくカレー！ 声をそろえる三日かな 有永真理子

239 ② 幕を閉ず第九を歌う師走かな 安森範明

238 ⑤ 和太鼓や腹にずしりと秋の雲 安森範明

237 飛石を渡る園児ら小春かな 安森範明

236 心込め自動車を拭く年の暮 安森範明

235 ④ 大寒の仔牛の太き瞳澄む 川西達子

234 ① 図書館へすべて返して冬銀河 川西達子

233 七度の干支めぐり来て年明け 川西達子

232 ② 一月や夫なき月日重ねたる 川西達子

231 ② 終の香りに押され旅はじめ 菅勲

230 ① 運動会開会の声天をつく 菅勲

229 ④ 秋遍路心の闇を一つ捨つ 菅勲

228 ① 台風過やぶれ芭蕉に身を写す 菅勲

227 ① コーヒーにマシユマロ二つ寒四郎 佐々木玉

226 ④ 冬の蚊がするりとバスに乗り込みぬ 佐々木玉

225 ① 玄関の置き配に添う柿落葉 佐々木玉

224 ② 着ぶくれの三頭身の園児たち 佐々木玉

223 ① 氏神の絵馬がカランと淑気かな 赤峯友子

新志 光夫 選

- 《65・94・104・123・130・165・193・200・216・251》
- 193 身の細る恋など出来ぬ着ぶくれて
時松由美子

若き日の切ない恋の思い出。今は半分諦めの境地ながら、出来れば、あの頃の様な恋をしてみたい。その心根を着膨れに包みつつ。読み手に色々と想像させて面白い句だと思います。激しい恋と滑稽な着ぶくれの対比が、絶妙です。

大神 愛子 選

- 《43・79・106・108・124・167・186・218・238・271》
- 218 母が居たあの日の朝や今日は雪
高橋 玲子

この年令の句を作られた人は、私と同じ位かな？と想像して読みました。母の年を越した今、一日たりとも父、母の事は忘れず、小さき頃からのアルバムをめくり乍ら、感動を受けた「あの日の朝」の出だしの句に心打られました。

足立 鶴男 選

- 《28・38・57・82・105・153・184・200・246・271》

早澤まり子 選

- 《16・20・38・48・79・107・164・179・205・234》
- 234 図書館へすべて返して冬銀河
川西 達子

今まで生きて来たいろいろな喜怒哀楽それらすべてお返しする、すべてのみこんでくれる場所を、図書館を選んだのは、作者の感性の鋭さと感じます。たくさんの書物が吸収してくれそうですね。あとはゆったり星を眺めましょう。

藤 万 葉 選

- 《2・23・155・165・191・209・231・238・243・263》
- 263 木の葉舞うかごめかごめの児らに舞う
石橋紀久子

誰もが幼い頃に遊んだ記憶があり口ずさむ事ができる「かごめかごめ」の歌詞に不気味な違和感を抱く人も多い。木の葉舞う寒々とした風に「舞う」をリフレインする事で無邪気な遊びの中に潜む闇へ誘われるような不思議な句となっています。

河野 輝暉 選

- 《98・146・153・167・186・195・200・213・217・274》
- 274 言の葉も除菌され病棟凍つる
川畑英里花

病院はまた病巣でもあり、不潔な場と言えよう。院内感染とも。この除菌は必須だが、自由な会話まで制限され、封じられる院内の空気があるのだろう。「言の葉」の表現には、日本民族特有の言霊信仰を感じとる。「草木みな能く言語ふと日本書紀にある。MRIの診断結果よりも「大丈夫ですよ」の医者と言の葉に癒される事も。無言は心も凍らせる、との主張を、中五で秀れた諧謔を混えて結晶し、佳什と思う。

河野 則子 選

- 《44・64・66・77・107・122・154・190・228・266》
- 122 古雑誌束を抜けだし春を知る
安部ユリ子

規律の中で生活していた学生時代。春、そこから自由な社会へ飛び出した作者の姿を思う。断捨離で、捨てられる寸前、捨てられてたまる

かと本自身が生きている物体の様に、捕らえ、下五を回春の情で締めくくった。

ここには明日への希望を再現しよう、との意志が感じられる。本の擬人化がおもしろく、頼もしい秀句と思った。

生野 義晴 選

- 《4・23・75・99・155・170・195・216・222・251》
- 216 独りにはひとりの至福冬満月
高橋 玲子

冬の満月に一人見入っている作者の心象風景が見えるような一句だと思います。ご主人を亡くされて独り身となった現在の暮しぶりは、寂しさを完全に消し去ることは出来ないけれど哀しみに負けずに前を向いてゆく生活には悔いは露ほどもないのでしよう。

「ひとりの至福」と言い切られた処に万感の思いが込められているのだと確信しました。ご主人への深い愛情と信頼に裏打ちされた清々しい一句だと絶賛します。

菅 登貴子 選

- 《7・19・37・43・44・77・97・107・155・171》

安部ユリ子 選

- 《6・18・37・107・138・188・204・255・266・277》
- 188 菜の花に染まる一色ファンタジー
吾 亦 紅

移り行く世の中でこの時期でしか見れない春の菜の花を自分一人じめした様な気分になれました。「ファンタジー」が素敵です。

古後 粒勝 選

24・61・84・153・166・195・200・207・222・270 ≪
270 あのと時の手袋いまも捨てられず
児玉 利子

言うまでもないが、手袋は冬の季語。あのと
きの手袋とは？どんな手袋だろう。大切にしてい
残しているのか、はたまた、捨てるわけにはい
かぬ品物なのか。

多くを言わず、省略のされた一句だが、読者
の想像を無限に引き出す一句でもある。

下司 正昭 選

8・57・98・159・169・170・171・238・239・259 ≪
259 枯れゆくものにウツの日の乳房
白土 正江

老いてゆく女の性の哀しさを表現されていて
感銘を受けました。男には絶対詠めない御句と
感じ入った次第です。

佐藤 優美 選

2・21・29・43・59・67・153・193・224・235 ≪
29 自衛にも敵地攻撃大枯野
下司 正昭

九条に抵触しないぎりぎりの自衛のためとい
う軍備も、今では先制攻撃もできる敵基地攻撃
も可能にする長距離ミサイルの弾薬庫もこの大
分の敷戸にも建設されようとしている。いざ戦
争が始めればこの大分市の団地の真中にある弾薬
庫が真先に攻撃対象になり、そのあと地は枯野
になってしまふ。弾薬庫を火薬庫といひ方を交
える小手先の政府の欺瞞には怒りしかない！

河野 洋子 選

6・21・38・77・105・153・167・179・193・221 ≪

内田トシ子 選

17・38・57・81・129・140・160・211・254・255 ≪
57 風花やわたしに降りる駅がない
立花真由美

この雪は、何処から来たのだろう。自分の落
ち着く場所を求め、彷徨い、とても哀愁を誘い
ます。私は「女は三界に家なし」の諺を思い出
します。

有村 王志 選

3・21・50・57・84・167・179・192・208・216 ≪
179 石のごと男がひとり冬の耕
鎌倉真由美

この作品は具象の典型とも言える作品、過疎
化、高齢化で農業の衰退が始まっている今日の
姿を男を石の形として現している。具象化で一
読、誰にでも理解できる内容になっているとい
ろが、この作品の特徴でもある。

井上 則子 選

4・46・57・67・106・164・195・200・209・216 ≪
216 独りにはひとりの至福冬満月
高橋 玲子

そうです。お月見は何も大人数でワイワイや
らなくても良いのです。実は私も一年中密やか
に満月を鑑賞しているひとりです。
ひとりの至福、色々みつけたいですね。

森山 秀子 選

21・41・58・77・88・101・112・154・171・251 ≪

赤嶺 広史 選

23・57・94・122・167・171・179・195・202・208 ≪

田代 直之 選

21・38・43・57・106・155・162・167・202・229 ≪

小田新一郎 選

20・26・108・131・158・182・195・209・216・241 ≪

永松左世美 選

21・28・89・93・106・153・167・174・197・224 ≪

御手洗豊海 選

3・22・39・100・153・168・179・206・214・217 ≪

森崎 洋子 選

19・27・46・80・93・102・211・229・244・257 ≪

薬師寺裕二 選

4・21・37・45・53・57・153・167・243・273 ≪

高倉 直人 選

21・53・68・94・119・193・216・222・240・268 ≪

安森 範明 選

31・43・50・76・102・155・184・197・225・235 ≪

加藤 征孝 選

4・11・23・35・115・153・165・183・207・257 ≪

岸本千鶴子 選

≪24・44・57・70・94・107・164・168・179・191≫

仲摩みや子 選

≪21・48・94・146・153・165・180・191・202・238≫

上田たかし 選

≪1・12・23・38・43・107・153・165・179・221≫

107 八月の灰汁が上手に掬えない

赤嶺 広史

先の大戦が終り、平和の大切さが実践されて今日の繁栄がある。しかし世界の情勢は、いろんな国々の諍いによって、多くの人々に苦悩を伝えている。人間の果しない欲望が戦争という悲しい現実を生んでゆく。その根元を「灰汁」として表現し、人間の愚かな行為を戒めている。

時松ヤスコ 選

≪54・84・106・117・130・135・142・193・207・247≫

海神 瑠珂 選

≪14・50・57・104・128・162・193・201・240・251≫

240 ぼくカレー！声をそろえる三日かな

有永真理子

正月が来て三日ともなれば、お節にも雑煮にも飽きてしまい、どこの家でもこの声が聞こえて来るのではないだろうか。内容的にも非常に共感できるし、言葉（音数）を無駄なく使っていて素晴らしい。「！」の存在も、声を揃えている感じをうまく表している佳句。

神 慶子 選

≪3・7・11・21・38・43・147・154・165・180≫

本田 圭子 選

≪1・21・48・57・155・164・189・195・235・241≫

赤峰佐代子 選

≪41・67・90・100・107・165・192・200・205・209≫

天田 泉美 選

≪7・21・153・157・164・171・176・227・242・248≫

248 お正月三半規管が音をあげる

稲田久美子

年末から年始の主婦の大変さは誰もが知るところです。帰省する家族を思って頑張ります。そしてそのまま本番のお正月を突っ走り、終わってみると体は正直に訴えてくるのです。疲れは思いのほか体に重く目まいとしてやってくるのです。作者はそれを「三半規管が音をあげる」とさらりと詠まれ、とても心地よかったです。「大丈夫、楽しかったんですよ、でも体はね」と、きつとたのしいお疲れだったのでしよう。おつかれさまでした。

立花真由美 選

≪41・63・68・107・153・165・168・176・195・273≫

168 鍵穴を覗く初日を受け入れる

上田たかし

人生の終盤に近づくほど、訣れ・孤独・病苦・加齢などにわたしたちは襲われます。小さな小さな鍵穴から覗くわずかな光さえも初日として「受け入れる」と詠んでいます。即ち、人生に

何があってもその全てを受け入れるという矜持を作者はお持ちなのでしょう。見習いたいのです。なぜか目頭の熱くなる句です。

加藤知嘉子 選

≪21・24・46・65・146・153・165・180・195・235≫

小野みち子 選

≪24・43・46・57・93・141・154・165・195・273≫

加納 知子 選

≪21・51・57・62・103・106・119・133・254・272≫

21 点滴が心音となる聖夜かな

足立 攝

私も入院する日が多く、点滴のお世話になっています。ぼとりぼとりと落ちてくる水滴を見ていると、生きるってこんな事かなって思ったりします。病床の静かな夜に、地球を巡る生命の水の不思議な物語を聞く思いです。

安田 文 選

≪3・25・31・43・61・67・79・94・192・268≫

白土 正江 選

≪4・9・23・57・78・155・165・179・220・226≫

23 未整理の父の遺品に棲む寒気

足立 攝

未整理の遺品とは何だろう、洋服、日記、万年筆、写真、色紙など、また形のないもの、たとえば思い出なども考えられる。父から特別に手をつけないでと言われていたのではなく「私」が手をつけにくくてなんとなく今日まで来てし

まった。「私」は父を尊敬し愛していたけど、父は「私」をどう思っていたのかわからない。そのことが私を不安にさせ遺品に寒気を感じる理由かも知れないと思った。父と息子、母と娘同姓であるがゆえの葛藤かもしれない。こういう問題を俳句にされ興味がわきました。

衛藤 和選

《17・21・63・147・152・182・197・232・265・276》

時松由美子 選

《22・53・70・119・129・136・138・162・167・253》
70 皺ひとつ増えて新年これもよし

佐藤 次江

新年を迎えたおばあちゃんの心意気が面白くていただきました。「これもよし」と言った心意気、女は皺がふえると気になるのにきつと楽しいおもしろいおばあちゃんがいて、楽しいお正月を迎えられたことでしょう。

川畑英里花 選

《11・21・48・57・93・97・153・165・168・259》

259 枯れてゆくものに鬱の日の乳房

白土 正江

鬱で乳房が枯れてゆく、という把握に魅了された。「母乳が出ない」ともれるが、掲句からは乳房の老いゆく様を想像した。かつてハリがあった肌は萎び皺が寄り、鍾乳洞のように垂れ：鬱鬱と己が裸体を見つめれば、乳房すら憂鬱そうに老いを増している。痩せた乳房の冷たい皮膚感も伝わってきた。視点が素晴らしいゆえ、個人的には「枯れゆくものに」の「ものに」

が残念。数ある一つにせず、ひたすら鬱の日に枯れる乳房の世界を描いても良いようにも思いました。

志賀 文子 選

《55・86・116・121・135・140・149・162・195・269》

121 静寂や目映いほどに寒の月

安部ユリ子

冴えわたった静かな夜。冷たい月の光が輝き、「目映いほどの寒の月」身も心も洗われるように感じます。

林 香澄 選

《7・24・38・57・112・155・191・193・202・207》

193 身の細る恋など出来ぬ着ぶくれて

時松由美子

何と楽しい発想が生まれるのでしょうか。こんなユーモアのある心で老いたいものです。

菅 勲 選

《21・26・44・51・124・150・162・191・238・275》

162 ボクの名を何故か知ってるサンタさん

古後 粒勝

子供を囲んだ頬笑ましい家族愛が感じられました。米国で子供からサンタさんはいるのかなと聞かれた父親が答えに窮し大手の新聞社に返答を照会したところ、新聞社から「世の中で最もすばらしいことは、目には見えないと教えた」と回答があったとの事を思い出しました。

佐藤 哲夫 選

《21・57・70・79・98・148・165・168・176・245》

安部スエノ 選

《33・56・69・81・96・130・136・192・204・247》

130 旧姓を呼ばれふり向く年の市

竹石 末子

人ごみの中ふいに旧姓を呼ばれ、思わずふり向いたらなつかしい友の顔が：！きつと話しはずんだことと思います。旧姓は普段は余り気にもとめないけど、なつかしい大事な大事なものです。

岡村 君香 選

《21・25・65・89・106・131・176・193・248・270》

248 お正月三半規管が音をあげる

稲田久美子

主婦はお正月の準備に四苦八苦です。目の回るほどの忙しさを「三半規管が音をあげる」と表現したところが素晴らしいと思いました。

石橋紀公子 選

《7・21・28・57・108・155・165・197・221・272》

155 手のひらは無限の自由零余子落つ

有村 王志

我手のひらをまじまじと眺めて見た。文字を書いたり、料理をしたり。孫の手を引いている時もある。この世に生を受けて以来実に多くの歴史を刻んできた。この先も、きつと活躍し続けてくれるだろう。本句の「無限の自由」がここにあり。それに比して零余子は、何とも頼りない存在だろうか。そつと触れただけで、ほろほろとこぼれてしまう、この対比がみごとです。

高橋 玲子 選

《12・19・23・43・153・165・170・221・232・256》

153 立っている我も一景冬の村

有村 王志

夕日を見送っている、裸木を見上げて、雪景色の山頂をながめている等々の中に立つ作者の心情までも推察させられる尽きない豊かさに感銘し立っている自身も一景と断言した心地良さ力強さを感じました。

清末ヤヨイ 選

《17・19・38・43・52・141・154・168・186・221》

佐藤 次江 選

《16・19・43・46・59・84・132・216・229・254》

佐藤 律子 選

《4・13・21・57・85・104・116・162・164・195》

鎌倉真由美 選

《1・7・23・48・57・61・165・169・240・259》

一瀬 祥子 選

《21・43・60・84・162・191・204・229・271・272》

21 点滴が心音となる聖夜かな

足立 攝

昨夏、人生初めての入院をしました。心不全でカテーテルアグレーション手術をしました。どうやら体の耐用年令が来たのでしょう。作者も入院し、それが聖夜の日。深々とした夜更けに点滴がいつのまにか心音と呼応している。病院の夜の静寂、物音は当直看護師の靴音のみ。

病への不安や聖夜という世の賑わいも仄見え共感する句でした。

夢野 はる香 選

《3・7・22・43・66・153・165・193・202・216》

児玉 利子 選

《20・23・108・153・164・170・179・202・249・278》

有永真理子 選

《21・58・70・93・101・107・155・167・179・223》

甲斐加代子 選

《21・33・38・88・153・165・171・220・252・271》

21 点滴が心音となる聖夜かな

足立 攝

私の生涯を振り返った時、若い頃より、随分点滴のお世話に成りました。でもその点滴に支えられたからこそ、病を乗り越え、こうして生かされる事にいつも感謝しています。何ヶ月も昼夜を問わず向き合った点滴、心音と共に寄り添う境地。病人にとりその時間は正に聖夜。中七下五のフレーズ、脱帽の限りです。祈って回復を待った心境は、経験者のみかも知れません。

幸谷 恵子 選

《4・7・9・23・43・89・94・97・155・164》

97 故郷や呼んでも届かぬ冬の月

田代 直之

「故郷は遠くにありて思ふもの」と詠んだのは啄木だったか。故郷を離れて暮らす者にとつてふと思ひ出す故郷は心の拠り所になる。帰る

たくてもそう出来ない事情。冬の月を眺める時に想いは遠く故郷へ。啄木の歌の続き「そして悲しく歌うもの」そんな感じをこの句から受ける。

赤峯 友子 選

《21・41・57・68・98・155・165・216・226・272》

165 躓いて北風の尾にしがみつく

足立 町子

躓いてとっさに何かにしがみついた。藁をも掴む気持ちではがみついたものは北風の尾であった。尾があるのはふつう動物であるが北風に尾があるのか？北風の尾という発想が面白い。

佐々木 玉 選

《9・24・43・68・89・154・165・201・258・272》

68 寒椿ころろをひらくふりをして

藤 万 葉

寒さにも負けずに開花する寒椿、まだこの寒さの中、本心はいえない。「椿」と「寒椿」の違いがしつかり現わされている句です

足立 町子 選

《3・7・57・130・200・208・221・226・239・275》

275 地球アラートどんぐりを備蓄せよ

川畑英里花

「どんぐりを備蓄せよ」だから今問題になっている熊のことだろうか、それとも森のリスのことだろうかと思う。リスの中央政府はついに国民（リス）に向けて警戒アラートを発したのだ。愉快な句、ほほ笑ましい句と安心していたらとんでもない。我々の地球は今、この瞬間に

もあちこちで警戒アラートが鳴り響いている。
どこかの国がミサイルを撃てば敵からの報復が
セットされているし、自然災害は突然にやって
来る。人類はあまりにも無力で無防備だ。
この句で今国民に「どんぐりを備蓄せよ」と
指令を出したのはリスの大統領かもしれない。

「地球アラート」で緊張したところをリスの世
界にしたことで、一瞬息を吐いたものの、奥に
隠された人間社会の現実が、よりその怖さを強
くしている。意表をついた表現がおしゃれで好
感が持てる。

令和七年第1回雑詠句会 選句用作品集

会員74名から221句が寄せられました。これを順不同にシャッフルしています。この中から
10句を選び、その中の1句に選評を書いてください。選句の要領は巻末を参照してください。

- 1 猪の畏に人の香消す煙
- 2 音たてて春を呼び込む野焼かな
- 3 春播きの芽の隙間にも世事を知る
- 4 春雨を集めて早し二毛作
- 5 春燈や花の如くに手話の指
- 6 巢立鳥ライン既読に無事知らず
- 7 野蒜のびる引く額明るし母郷かな
- 8 ツバメ飛ぶ姿消しゆく令和の空
- 9 米作りイブキ実のれば平和なる
- 10 柔らかな雨の匂いに春を知る
- 11 湯上りの幼子はみな春の色
- 12 松芽摘む手首の若さ雲が知る
- 13 哀楽の言霊をのせ流し雛
- 14 疎まれて屁糞葛に会いに行く
- 15 青田風陽気な父のねぶか節
- 16 桜貝少年雨に濡れてゆく
- 17 勇人君！戦後の麦めし不味かった
- 18 前世とはかくの如きカラ・フランス

- 19 大寒や六法全書がデンとある
- 20 薫風や微かに揺れる夢の橋
- 21 震度四なすすべもなき冬の蠅
- 22 母の日や夫婦茶碗にある月日
- 23 孫の来るを待つひとときや赤きバラ
- 24 香り立つ山一面に椎の花
- 25 薫風やころころと山羊の糞
- 26 寒灯下これで良かった事にする
- 27 こでまりや八方美人の態をして
- 28 アンパンに長き行列夏の空
- 29 ぶきつちよな箸の握りや秋高し
- 30 夏帽子手紙にのこる海のいろ
- 31 向日葵のまん中にある火の記憶
- 32 弓ひけば早朝の音すがすがし
- 33 豊作にいざ腕まくり梅仕事
- 34 蛇穴を出て万博の群の中
- 35 たんたんとして読む九条の花吹雪
- 36 沈黙が苦手なんです青嵐

- 37 広重のぶるうこぼれて牽牛花
- 38 先生は出しやばらないで夏の雲
- 39 早苗田の光る細波母さななの影
- 40 くるま座で語り合いたい昭和の日
- 41 ラブレター開けば春の風になる
- 42 野を行けば春のポケットあふれくる
- 43 突き抜けた青空の先ネモフィラの海
- 44 坂道を転がっていく蝸牛
- 45 バラ一輪戦地へ向かう兵士にも
- 46 今生の余白に咲きぬ濃紫陽花
- 47 草刈女馬草牛草今は昔
- 48 鉄線花密かに咲いて絹の雨
- 49 どの人も行き先のあり初夏の駅
- 50 草刈女ぼつんと張った丸い腰
- 51 盆までの生命と聞きし真昼時
- 52 過疎埋める一と役なれず合歓の花
- 53 短夜や目覚めては彼の人恋し
- 54 父の旅より抜け出して来た蛭蝶
- 55 断ち切れぬ戦の連鎖梅雨深し
- 56 チェンソーを止めて静寂夏の蔭
- 57 ピカピカの入園グッズみな恐竜
- 58 キーウへと届けし祈り虹の橋
- 59 片蔭に入りて介護の話聞く
- 60 蛭かご記憶の糸を手繰り寄せ
- 61 海荒れし舳先佇む冬遍路
- 62 花惜しむ国籍捨てるといふ友と
- 63 君きみづけで母を呼ぶが父の日や
- 64 独り居の声出し問答夏はじめ
- 65 年金の消え行く早さ翮雲
- 66 鴉の子吾子との日々を思い出す

第2回雑詠句会 Ⅱ 作品募集Ⅱ

※大分県現代俳句協会では、内部の勉強会として年三回の通信句会を開催しています。今回募集するのはその中の一つで、会員なら誰でも応募できます。(投句は会員だけです。選句は会員外もOKです) ※一人三句。当協会には未発表のもので、なるべく当季(今ごろの季節)のものを、ご用意ください。 ※作品は自動的に「年間一句賞」の対象になります。(年間一句賞は総会で表彰します) ※締切は一月三十一日(土) 郵便事情が悪いのでなるべく早めの投句にご協力ください。 ※送り先は事務局 (〒879-7151大分県豊後大野市三重町西泉4369足立攝方 FAX 0974-22-3749) ※同封のFAX用紙でお近くのコンビニからお送りくださると便利です。送り方はコンビニにおたずねください。その他、郵送やメールなど、読めさえすれば形式にはこだわりません。

67 心太ゆゆしきことはさりげなく
68 天にのぼる竜の尻尾につかまって
69 両の手に掬いこぼる清水かな
70 からたちの花をあげよう君だから
71 万緑が小心者の背中押す
72 春雷に「恐かったね」と猫をだく
73 まん丸のつまめば甘き草いちご
74 お喋りにどくだみの道伸びてゆく
75 春の泥泣虫太郎膝小僧
76 焼け残る萱かやの小鳥の遊び声
77 影にても背おえば重し孫の春
78 花莫蔭で点滴受ける幸せよ
79 指揮棒の放物線に紋白蝶
80 逃げ水や七十路いまだ道半ば
81 絵日傘の鳴れば故郷の高さかな
82 仏前にカーネーション映ゆる朝
83 軍事費をツイばんでいる磯千鳥
84 意地っぱりだったあの頃トマト盛る
85 花嫁の憂いのごとく白菖蒲

86 空腹も滋養のうちや天高し
87 菜の花やクレヨン色の本を抱く
88 愛しき妻寝入り端なる籐寝椅子
89 春の宵ふたつの盃に名は美吟
90 筍や三年日記をまづめくる
91 炎天のデモにマドンナ・ウーマン・リヴ
92 初炬燵父と二人の家族論
93 晩年の男の背のふと寒き
94 恋ふ花に並ぶひと時夏の蝶
95 ヘソ天の猫と私の夏座敷
96 衣更へとは身心のリフレッシュ
97 豆飯やひよっこり亡母が顔を出す
98 入学児肩に食い込むランドセル
99 片隅に君の名記して袋掛
100 どの家もいつか空く家寒灯下
101 花冷えのヘッドライトの朝出かな
102 夕桜母校の生徒空爆に
103 あの頃は従順でした夾竹桃
104 碧空をしるべとしたり夏帽子

105 折鶴ににんげんの息長崎忌
106 涼やかな公園の中犬と我
107 早苗田を見渡す老夫背に夕日
108 大あくら父の居場所の夏座敷
109 今日も又九条の歯車見詰めおり
110 ホトトギス峽の孤立を深めてる
111 新米を味わうように活字食む
112 妻振るいし雑誌に死せりゴキブリは
113 夏蛙タクトは風のコンサート
114 ノースリーブの腕のまぶしき爆心地
115 夫の視線浴びて剥きたる夏みかん
116 古里は海まで続く麦の道
117 ひと言が行き場をなくし梅雨じめり
118 靴べらでかかと滑らし夏にいる
119 茄子の花つかみどころのない老後
120 恙無き独りの暮しや茄子の花
121 夏草の勢い欲しやわれ八十路
122 思い出の母の抱えしグラジオラス
123 愛子さま御印おしるしゴウツツジかな
124 不安症という病もありて夏
125 わが夫は単身赴任涅槃西風
126 夏風邪に微笑みたたむ句帖在り
127 亀の子をそとつとまみて買うてみる
128 雨予報少し外れて枇杷たわわ
129 花菖蒲見つむ母の背われもまた
130 コミバスのコース変更田植盛り
131 一人でも乗れるよ自転車夏帽子
132 駅ピアノ弾きおくんちを締めくくる
133 滝落ちる太古の地層削りつつ
134 梨畑蟬しぐれに背を押され

135 放棄地や媪の力花菖蒲
136 オクラホマ・ミクサー踊ろう麦の秋
137 野イバラや歩み来たりて道一本
138 スリッパを藪くさに替えてスキップす
139 正装の毛虫一匹急ぎ足
140 夏めくや生を得てリハ中の我
141 晩鐘の余韻ななめに麦の秋
142 丸薬を十粒ほどの梅雨湿り
143 白鷺の給餌は田んぼほしいまま
144 格子戸をくぐりぬけたらそこは夏
145 小さき歩や一步は無限の夏帽子
146 花水木咲きてあの日の庭となる
147 柚子の花畑で見れば土気色
148 かなぶんが神の使いとなる日暮れ
149 麦は穂に非核宣言田を灯す
150 新緑のキャンパスに描く焼け残り
151 鯉幟ガザの子供は空が無い
152 水仙花玄関に置く男靴
153 地ビールを小脇にゴロ寝壱岐の帰路
154 恋しさも中ぐらい鳴り海酸漿うみほおずき
155 父母と新茶つみたる今は過去
156 興に乗りワルツ踊ればおぼろ月
157 言いたくて言えずに湯ざめ傘寿かな
158 たゆたひて海馬の闇へ花筏
159 泉下にて吾子は達者とほととぎす
160 春風や煩惱色の服まとい
161 チューリップ咲いてゴッホの絵に戻る
162 とんがりて共に競うやはずむ春
163 軒燕夫婦喧嘩を見届ける

164 蝉しぐれ怠惰な日々を責めるよに
165 さらここに思いゆだねる五十路かな
166 戦争が犇はめいている蝉の穴
167 万緑の扉を開ける夜雨かな
168 砲音が春日に交る日出生台
169 つらつらと空豆笑ひ上戸かな
170 空家をば三度訪ねし初燕みたび
171 梅雨入りで蛙も忙し大合唱
172 舞い終えて静かに消ゆる螢かな
173 立春や門扉わずかに軽くなる
174 新茶揉む父母の手数の懐かしや
175 子の家へ去る友の来て夏座敷
176 苜蓿むすしイエスの父を知るマリア
177 黒南風の暖簾ことごとく風孕む
178 はつなつやどの隙間から攻めようか
179 五月雨に流れてしまえこの想い
180 梅雨寒や法事案内の手書き文
181 虹二重くぐつてみたい縄電車
182 戦争はいやだと八月の空が
183 草を刈り棚田の眠り解いてゆく
184 余生とは捨ててゆくことえこの花
185 探すのは止せ生きる意味水羊羹
186 岩苔や郭公森をひとり占め
187 老年の夢はそこそこ花は葉に
188 菜の花も好きな列車があるらしい
189 猫抱いて散歩する人秋彼岸
190 あと三日待っておくれか蝌蚪生まる
191 藤の根にがんじがらめになる地形
192 健やかな風の行き交う薔薇の畏

193 万の紫陽花なかのひとつに母の顔
194 雨似合うみずほの国は脈脈と
195 旅人となりて春日の二条城
196 重き荷を右に持ち変え春立ちぬ
197 遠い目の今年までかと田水張る
198 車椅子の夫の頭上にふる花火
199 点滴の音は自分史新樹光
200 憂ひてもなほ鮮やかに濃紫陽花
201 すかんぼとなすこともなく風に乗る
202 吾に棲む鬼もいとしき年の豆
203 夏の朝びんたの教え亡父無口
204 亡骸を粧う晴れ着や春の朝
205 数独の解けてほゝえむ夏の汗
206 ソーダ水予定のある日戻り来る
207 くちなしが垣根を越えてついてくる
208 京鹿の子人待ち顔の富士の嶺
209 アウトバーン飛ばせアスパラガスを追え
210 老鶯や早くお帰り夕暮れる
211 籐椅子の藤のほつれや幾年が
212 巻き戻しきかぬ余生やねじり花
213 花曇晴れやかに友退院す
214 代掻くやまあるい地球に添ふやうに
215 奥能登の傷跡深しつばめくる
216 ざわざわと大気騒めく花田植
217 少年の瞳に映る冬の闇
218 年をとるとはかういふことか蝸牛
219 君がいた天領日田や花曇
220 女郎蜘蛛餌を待つ間も凜として
221 溜息をいくつ残して藤の花

(以上)

◆12ページから14ページ掲載の第1回雑詠句会作品、221句の中から10句を(選句)し、その中の1句に二百字程度の(選評)を書いてください。選評は短くても、多少長くても、書かなくてもかまいません。

◆選句・選評には当協会の会員以外の方でも参加できます。当協会は俳句の多様性を尊重しています。なるべく多くの意見をうかがうことが、私たちにとっての勉強であり同時に刺激です。ぜひ、ご協力をお願いします。

◆選句は番号の若い順に並べて書いてくださると助かります。ただし、用紙を汚してまで書き直す必要はありません。

◆間違いを防ぐために同時に上五もお書きください。事務局八年の経験の中で、作品番号と上五が完全に一致したことはこれまで一度もありません。違った場合は上五を優先します。

◆当たり前のことですがご自分の名前を書くこともお忘れなく。二、三回に一度くらいの確率で名前の記入のない人がいます。それで投句用紙の名前の位置を変えました。

◆選句・選評の締切は1月31日(土)までをお願いいたします。13ページ「囲み記事」の「第2回雑詠句会」の投句締切日と同じです。

◆今回に限らず事務局は、できるだけ会員のみなさんの融通を利かせます。締切日を過ぎて「あ、しまった」と思ったときは、あきらめずに一度ご相談ください。編集の都合で間に合わないときもあります。編集の都合で間に合わないときもあります。(これは事前に分かりません)

◆同封の選句用紙を使うと、どこコンビニのファックスでもほとんど50円で送れます。使

方が分からないときはコンビニにおたずねください。自宅のファックスで送ってもOKですが、筋が入って読めなかったり、ローラーの吸い込みが悪く二枚に及ぶことが多発しています。自宅にファックスがある方でも、メンテナン스에自信がない方はコンビニをおすすめします。

◆ファックスで送る場合の一般的注意として、エンピツ等の字の薄いもの、画数が多いのに小さな字(潰れて読めないことがあります)は、お避けください。

◆選評などで誤字脱字や読みにくい文字がたくさんあります。事務局では簡単に無効にせず何とか読み解こうとするため、五倍も十倍も時間がかかることとなります。「中学生でも判読できる原稿」にご協力ください。

【新会員のみなさんへ】

◇当協会には第一回雑詠句会(三句出し)、第二回雑詠句会(三句出し)、自薦作品(四句出し)という、年三回の内部の通信句会(勉強会)があります。名称は違いますが、みんな同じものです。いずれも協会の日常活動の一環ですから、大会のような投句料は発生しません。

◇この年三回の勉強会に提出された全作品の中から、特別選者による「年間一句賞」が授与されます。特別選者は総会で決められ、現在は三人です。各会員が投句した全句が、自動的に「年間一句賞」の対象になります。

◇当協会は会員相互の「教えあい学び合う気風」を重視しています。俳句を作りそれを仲間に見てもらふこと、また仲間の俳句を読み、その優

劣を自分なりに判断することは、俳句活動の基本です。内部の勉強会に参加するかどうかは会員の自由ですが、参加すれば俳句は確実に上達します。作品も、選句も、選評も、「人の目に晒すこと」が上達の近道です。

◇自分の句に行き詰まったとき、解釈の難しい作品に出合ったときなどは、遠慮なく事務局にご相談ください。事務局は会員と協会を繋ぐ「窓口」の役割を果たしています。

お知らせ

第36回

大分県現代俳句協会総会

日時 令和8年2月23日(月・天皇誕生日)
10時30分開会 16時迄には懇親句会を含めて、すべての予定が終了します。
会場 J・COMホルトホール大分302

協会の方針を決める大事な総会です。今回は二年に一度の役員改選総会にあたります。会員外の方もオブザーバー参加できます。

《懇親句会》

食事を挟んで午後からは恒例の懇親句会を開催します。一人二句出しの事前投句制初心者の投句を歓迎します。

送り先…事務局まで(総会参加者のみです)
締切…1月31日(土)



大分県現代俳句協会

OITA-KEN GENDAI HAIKU ASSOCIATION

会長 有村王志



《事務局》

〒879-7151 大分県豊後大野市三重町西泉436

足立 攝方

TEL.&FAX. 0974-22-3749 郵便振替 01900-5-57481

URL:<http://www.gendaihaiku.net>

E-Mail: info@gendaihaiku.net